

桜井孝身によってアングラ・アーチストであることを証明された

ゼロ次元「夢タントラ学派」

加藤好弘

いまパリでは、有色人種の外国人達を国外に追放しようとしており、彼もその網にかかってしまったらしいが、フランス政府は彼がアーチストであることが本当に証明されるならば日本への強制送還を見送り、彼を受け入れてもよいと云っているようだ。

美術というアートが、アメリカの現代文明の進歩発展に反比例するかのようになり、かつてのフランスの前衛的栄光から後退して久しくなっているにもかかわらず、有色人種であろうともアーチストなら人間並に取りあつかってもよいと、フランス人は考えているらしい。元ビートルズのポールを国外追放した日本人なら、外国の著名な絵描き達を東南アジアから押しよせてくるカラユキ娘なみに取りあつかうはずであっただろうに、パリで逮捕された桜井は彼がアーチストであったという、当然すぎる事実だけを思い出すだけで、飛びあがらんばかりに喜ぶ奇跡が起こり、いまは昔の「九州派の芸術活動」の衝激を20年ぶりに復活させようと思いたって、そのときからアーチストであったことを古き仲間達自身にも「証明」させ、お前達もじつはアーチストだったんだよ、と思いださせようとしているようだ。

だが僕のようなものが、桜井を「芸術家」として証明させてもらえるものだろうか？と、大変心細く思ってしまうのは、いったいフランス人はあのシュールリアリズム運動に象徴されるような西洋の伝統芸術全体への固定概念に対する異議申したての行為であった、その現代芸術発生の原点としての基準から今もアーチスト達を評価しうる「視点」が保持されているものだろうか、という疑問があるからなのである。

芸術のなかでも最も機能性のなくなったものとして「生ゴミ」か異常心理の資料ぐらいにしかあつかわれていない現代の「絵描き達」をまだアーチストであると証明してくれようとするフランス人に日本人として感動したのだから、ともあれ僕も機井に出会って体験した死んでも忘れられないだろう記憶のほんの一部分だけでも記入してみる勇気がわきあがってきたものだ。